

身近な人からの関わりによって 変化する児童生徒の内的な体験



~自己肯定感を持ち、心が折れても 立ち直ることができる児童生徒を育むために~

今回の研究から、子どもにはそれぞれの心の成長に応じた大切な体験があること、それらを体験する時には身近な人による見守りや関わりが大切であることがわかってきました。また、それにより子どもの体験の捉えが変化していくことが見えてきました。

このような体験を、ひとつひとつ肯定的に積み重ねていき、身近な人との関係の中で育まれる心が「折れない、しなやかな心」となっていくのではないかと考えられます。私たち教職員も、その大切な役割を担っているとと言えます。

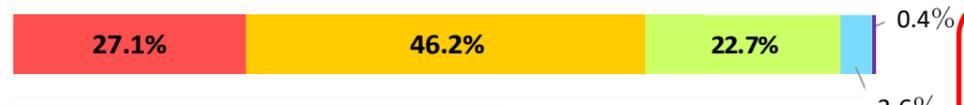
引用・参考文献

- ◇「時間のかかる営みを、時間をかけて学ぶための心理療法入門」(小松貴弘・渡辺亘・中村博文 創元社 2019)
- ◇京都府総合教育センター研究紀要 第8集(2019)
- ◇センターだより第201号(2019 7月発行)、第203号(2019 9月発行)、第204号(2019 10月発行)
- ◇「自己肯定感を高め、自らの手で未来を切り拓く子供を育む教育の実現に向けた学校、家庭、地域の教育力の向上」(第十次提言)(教育再生実行会議 2017)
- ◇「我が国と諸外国の若者の意識に関する調査」(内閣府 2013)

「折れない、しなやかな心」を育てるために

日本の子どもの自己肯定感は、諸外国と比べて低いという調査結果が示されており、教育再生実行会議(2017)の第十次提言においても自己肯定感を育むための取組を進めていくことの必要性が示されています。また京都府総合教育センターが平成27~29年度に取り組んだ「前思春期」に関する研究の中で、小学校教職員対象に行ったインタビュー調査(2017)においても、最近の児童の特徴として「自分に自信がない」児童が増えているという声が挙げられていました。これらのことを踏まえ、当センターでは、平成30年度から「自己肯定感をもち、心が折れても立ち直ることができる児童生徒を育てるために」を柱として研究を進めています。まず、本研究では子どもの自己肯定感に対する教職員の意識や実感を広く知りたいと考え、意識調査を実施しました(平成30年度教育相談講座を受講した全校種の教職員254人が回答)。

日本の子どもは「自己肯定感」が低いと指摘されていますが、そう思いますか。



失敗を恐れる児童生徒が多いと感じますか。



自分に自信がないような児童生徒が多いと感じますか。



教職員が児童生徒の自己肯定感の低さや失敗を恐れる児童生徒の多さを実感していることがわかりました。

「自己肯定感を育むために先生方が心がけていること、取り組んでいること」は何ですか。(自由記述から)

- ・児童生徒のありのままを認める
- ・子ども同士が互いを認め合う取組
- ・居場所をつくる
- ・保護者や教職員同士で子どもの話を共有する...等

児童生徒を理解し、安心できる人間関係と雰囲気をつくりながらありのままの自分を受け入れることができるようにする
→「共にいる」関わり

Beingの関わり

- ・わかりやすい授業づくり
- ・挑戦させる
- ・やりきらせる
- ・できたことを認める...等

児童生徒自身が充実感や達成感、成功体験を得られるようにする
→「共にする」関わり

Doingの関わり

教職員は、2つの軸での関わりを行っていることがわかりました。

これらの結果から...

教職員は自己肯定感を育むために様々な関わりを心がけていることがわかります。それにもかかわらず、児童生徒の自己肯定感が育まれていないと実感していることもわかりました。

「失敗から立ち直りにくい児童生徒と

失敗してもまた立ち直れる児童生徒とは、

何が違うと思いますか。」 (自由記述から抜粋)

失敗をしてもがんばりを認めてくれる人や励ましてくれる人がいたかどうか。

失敗があっても再チャレンジが許されるかどうか。

認められているという信頼感を持っているかどうか。

成功体験も失敗体験も経験し、肯定的に受けとめられてきたかどうか。

失敗をわかってくれる大人や友達がいるかどうか。

大人が手を出し過ぎていないかどうか。

自分が活躍できる場面があるかどうか。

温かい学級集団や周囲の理解があるかどうか。

教職員の声を整理すると…

**心の成長とともに変わっていく
‘子どもの体験’ と ‘教職員の関わり’**

大切な

教職員の声から、「子どもが立ち直る力を身に付けていくには、それぞれの心の成長に応じた大切な体験と関わりがあること」が見えてきました。

子どもにとって
大切な体験

教職員が
大切にしている関わり

小学校の時期

- ◆多くの体験(量・種類)
- ◆自分の中でうまくいった感情を大切にする体験
- ◆立ち直る体験
- ◆再挑戦の体験



中学校の時期

- ◆自らが活躍できる場の広がり
- ◆周りからの様々な刺激を受ける体験
- ◆体験を通して自分自身のいろいろな面に気づき、自分らしさに目を向け始める



高等学校の時期

- ◆うまくいかなかった時に身近な大人に支えてもらう体験
- ◆親密な友人とわかり合える体験
- ◆過去の体験(失敗体験も含む)の意味や価値を見直す



- ◆子どもの“守り”となる温かい学級集団づくりを大切にする
- ◆子どものありのままの感情を受けとめる



- ◆学級や部活動など、子どもがいろいろな場面で活躍できるよう、集団づくりを大切にする
- ◆子どもそれぞれの目標に焦点を当て、個に応じた理解や関わりを進める
- ◆子どもの悩みや迷いに寄り添い、自分を見つめる力を育てる



- ◆子どもそれぞれの個性やそれまでの経験を尊重する
- ◆自分に対する理解を深めながら、理想と現実の折り合いをつける力を伸ばす



Column

子どもから大人へ、心が成長するとは… ～心の成長に人との関わりが不可欠～

生まれてから

生まれてから数年の子どもは、大人から世話されることを必要とします。そして、生きていくために他の人々と関わり合うことを身につけていきます。この時期の経験により、子どもは「他者との相互作用の世界」に足を踏み入れ、大人との関わり合いの中で心は姿を現し、生涯を通じて育まれていくプロセスが始まります。

学校生活の始まり

学校生活が始まると人間関係が教職員・友達・地域の人々へと広がり、学習活動が中心となります。学習においてはどの子どもも「わからない経験」からスタートします。この時期は、教職員や大人や同級生から適切な導きを得たり、助け合ったりしながら「わかる経験」を積み重ねていくことが大切です。そうした他者との出会いが心の成長の鍵になります。

**思春期の危機を
くぐり抜ける**

思春期になると、身体の成長と変化により心は強く影響を受けます。「自分って何だろう、どうするべきなのだろう」「他人から自分はどう見えているんだろう」と自意識が高まります。また、誰かと一緒にいるのも居心地が悪い一方で、誰かと一緒にいないと安心できない、そんな思いに自分自身が揺さぶられて、感情も人との付き合い方も不安定になりがちです。この時期には、支え合い一緒に歩いてくれる仲間や、あるいは自分を適切に導いてくれる大人を求めます。

